

# くまもと在宅支援病院(熊本市東区)

病院:57床

緩和ケア病棟/21床

障害者施設等一般病棟/36床

うち地域包括ケア病床21床を含む

実施日時:2025年2月20日

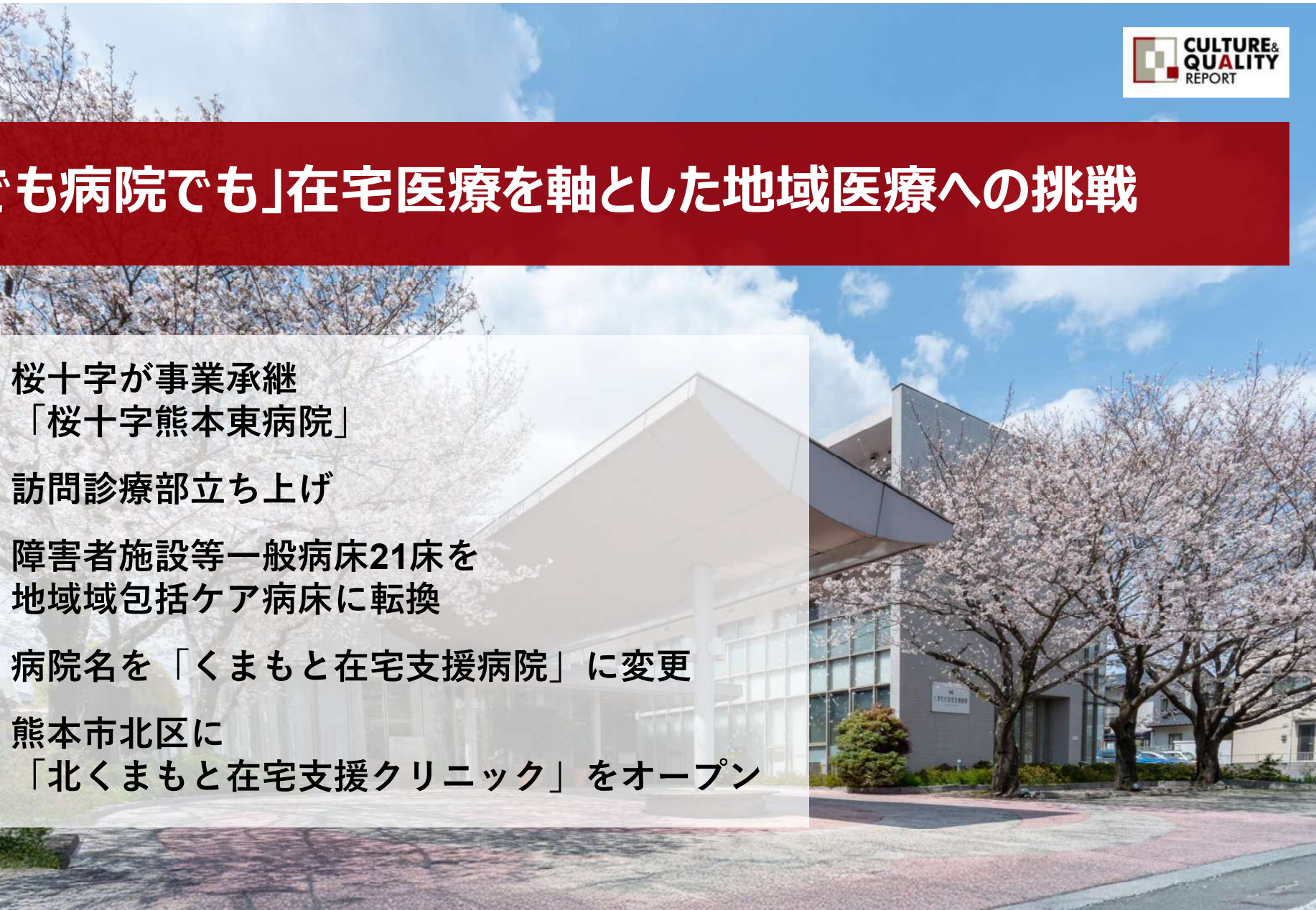
※肩書等は取材当時

## 「家でも病院でも」

## 在宅医療を軸とした地域医療への挑戦



## 「家でも病院でも」在宅医療を軸とした地域医療への挑戦

- 
- 2017年 桜十字が事業承継  
「桜十字熊本東病院」
- 2020年7月 訪問診療部立ち上げ
- 2024年2月 障害者施設等一般病床21床を  
地域域包括ケア病床に転換
- 2024年6月 病院名を「くまもと在宅支援病院」に変更
- 2025年6月 熊本市北区に  
「北くまもと在宅支援クリニック」をオープン

# 病院が抱えていた課題

## 「特別な病院」と言われていた、もどかしさからの出発



外来ってやっているの？  
リハビリで入院できる？  
普通の風邪でかけれる  
病院なの？

### 地域に閉じた病院から脱却するには

がんなどの病気で痛みを抱えている患者さまを専門にケアする緩和ケアのある病院として、熊本市内でも有名でした。

そのため「特別なケアが必要な方の専門病院」というイメージが強く、地域にとっては、近寄りがたい病院でした。経営的な安定のためにも、地域に開かれた病院づくりが必要でした。

## 「家で過ごしたい」という 患者さまの声に応えるためにはどうすればよいか？



**患者さま、ご家族の希望を叶えるために！**

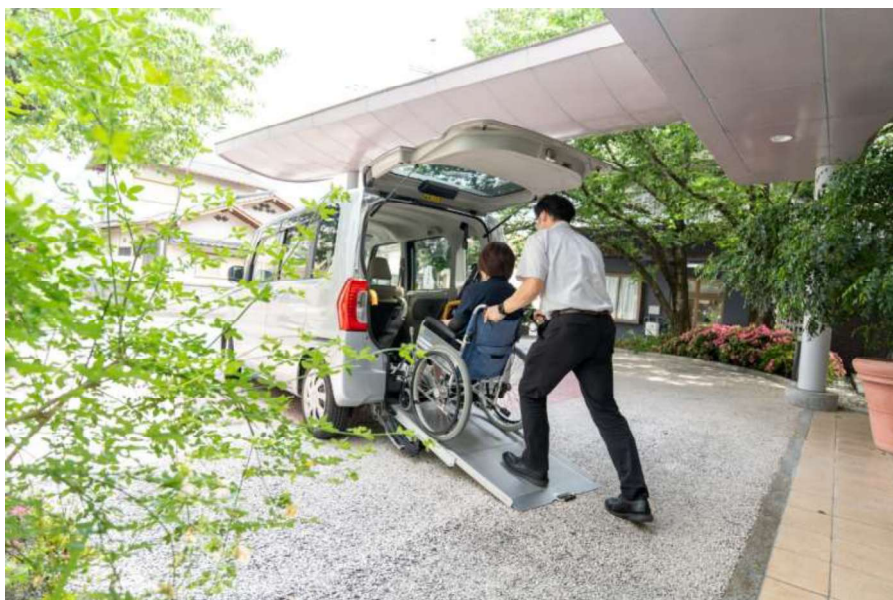
緩和ケア病棟では最期を「家で過ごしたい」というがん患者さまの声が多くありました。ただ、ご家族の不安も大きく、自宅に戻ることをあきらめることも・・・。

外部の訪問診療に頼らざるを得ない状況では、「家⇔病院」の入退院を何度も繰り返すことは、時間的なロスも大きく、自前の訪問診療部の立ち上げは悲願でした。

どう向き合ったか？

どう向き合ったか

## ステップ1：自前で「送迎」を開始！ 小さな一歩から始まった「地域とのつながり」



### まずやれることから！事務長自ら送迎

まず、地域に知ってもらうために送迎を開始。運転業務は、園山事務長と事務局の富田さんが率先して担いました。

ある有料老人ホームでは、職員が入居者の通院の付き添いまで手が回らずに定期受診ができていませんでした。送迎を開始したことで、地域が抱える困りごとを知るきっかけにもなりました。

## ステップ2：連携の輪を地域に拡大！

クリニックや介護施設等、地域とのつながりを深めるために！

### 入院患者数の比較

2022年 vs 2024年 比較分析



営業強化で入院患者数2.1倍に  
自宅からの入院割合も5割にup!

直接入院を増やすために、地域連携の方針を見直しました。急性期病院だけではなく、地域のクリニックや居宅介護事業所、介護施設など営業を展開しました。

その結果、入院患者は2022年度から2024年度で2.1倍に！うち自宅等からの入院割合も39%から53%にアップしました。

## ステップ3：「訪問診療部」の立ち上げ！ 患者さまの願いを叶えるために、在宅医療に挑戦！



### 念願の訪問診療部の開設を病院全体でサポート

緩和ケア病棟の前田医師の想いに共感し、在宅医療の経験豊富な菅村医師が入職。これをきっかけに、訪問診療部の立ち上げに踏み切りました。

医師1名・看護師1名(パート)からのスタートでしたが、送迎を通じて地域のニーズを把握できていたことが功を奏し、患者20名での滑り出しとなりました。クラウド型電子カルテの導入など、準備は手探りの状態でしたが、24時間365日の体制を構築するために、病院全体で支えました。

## ステップ4：レスパイト機能を強化 「病院か家か」ではなく、「家でも病院でも」を叶えるために！



### 在宅を支える体制づくりを整備

障害者施設等一般病床の一部を地域包括ケア病床に転換し、在宅介護を支えるレスパイト入院を強化しました。訪問診療部と併せて、

「家⇄病院」の入退院がよりスムーズにできるように体制を整えました。

レスパイト入院とは：

レスパイトは「休息」「息抜き」という意味で、在宅介護を担っている家族の負担軽減などを目的としています。

# 病院の姿勢を、誰がみてもわかるように 「くまもと在宅支援病院」に名称を変更！

コンセプトは「家でも病院でも」  
住み慣れた地域での暮らしを支える病院に！

2024年6月1日、理念を表現した病院名に変更。

「家か病院か」ではなく、

「家でも病院でも」をコンセプトに、  
地域の医療機関や在宅サービスと連携して、住  
み慣れた地域で暮らすことを支える病院として、  
新たな一歩を踏み出しました。



くまもと在宅支援病院  
Sakurajyūji Group

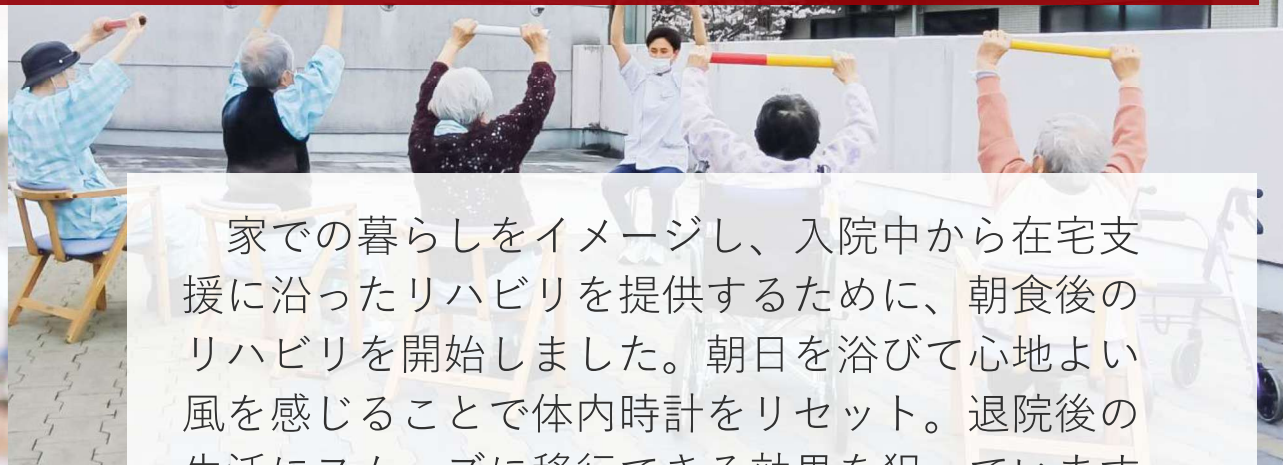
**「家でも病院でも」  
コンセプトを明確にしたことで  
自ら考え行動する組織に成長**

自ら考え行動する

## 体内時計を整えて「在宅」へ 朝リハ始動！ ーリハビリテーション部ー



朝リハ担当の藤木さんとリハビリ部の松元主任



家での暮らしをイメージし、入院中から在宅支援に沿ったリハビリを提供するために、朝食後のリハビリを開始しました。朝日を浴びて心地よい風を感じることで体内時計をリセット。退院後の生活にスムーズに移行できる効果を狙っています。

患者さまからは、「空が見れて気持ち良かった」「元気にならなきゃ」「朝の運動習慣があったのを思い出しました」などのお喜びの声を多くいただきました。

## 注射薬の回収忘れをなくすためにチームで対応 － 医事課・薬剤科 －



薬剤師の鬼塚さん

訪問診療に力を入れているため、注射薬が処方されることが度々あり、注射薬の回収忘れが問題になっていました。

そこで、訪問診療部、医事課、薬剤科で協力して、注射薬の払い出しマニュアルを作成。チームで対応できるように工夫しました。多職種が共通認識をもって動けるようになり、月ごとの管理もスムーズになりました。

## ホッとした時間を過ごしていただくために手作りおやつを提供 － 栄養科・連携室 －

毎週木曜日、ソーシャルワーカーと一緒に、緩和ケア病棟の患者さまにおやつとコーヒーをお出ししてホッとする時間を過ごしていただいています。おやつはすべて管理栄養士、前田さんの手作りです。

園芸リハで育てた野菜を使った、シソのパウンドケーキや高菜漬けのパンなど喜んでいただいています。



緩和ケア病棟の患者さまにホッとする時間を過ごしていただきたいと思います。

**地域の信頼を獲得するために  
在宅を支える病院としての専門性を追求**

専門性を追求

## 医師、看護師、作業療法士の 多職種で成り立つ専門チームで地域の信頼を獲得！



堀医師

松元主任

木山看護師長

前田医師

リンパ浮腫外来のある病院は、県内でも少なく、自宅で療養するがん患者さまをはじめ、各地から患者さまが訪れます。

リンパ浮腫療法士の専門知識を持った医師、看護師、作業療法士の多職種でケアを行います。さらに、自宅でセルフケアできるようにサポートすることで、在宅療養を支えています。

専門性を追求

# リハビリスタッフの7割が、がんリハ研修を修了！ 専門性を追求して地域の信頼を獲得！



PTの尾上さん、矢加さん、竹之内さん   STの佐藤さん、宮地さん   OTの松元主任、長田さん

# インタビュー

緩和ケア病棟専任医師の前田先生は、  
いつもスタッフステーションにいらっしゃいます。  
どのような思いからですか？

患者さまとご家族は、時に異なる思いを抱えていることがあります。在宅で過ごしたいという願いと、安全・安心な病院での療養を求める気持ちの間で揺れ動いたり、ご家族間でも意見が分かれることもあります。それぞれの立場や心情を丁寧に汲み取り、より良い方向へと導くことが、緩和ケアに携わる医師の重要な役割だと考えています。

患者さまとご家族にとって、残された時間は限られています。その貴重な時間を無駄にしないためには、患者さまの表情や様子のわずかな変化をリアルタイムで捉え、迅速かつ適切な対応をすることが不可欠です。そのために最も効果的な方法が、常にスタッフステーションという情報が集まる場所に身を置くことだと考えました。

緩和ケア病棟 前田医師

## 訪問診療部の開設によって 病院の役割が変わっていったと思われますか？

訪問診療部の開設によって、患者さまは「住み慣れた家で過ごす」という選択肢に加え、「必要に応じて病院での手厚いケアを受ける」という選択肢も自由に選べるようになり、療養の場所に関する選択肢が広がりました。これは、患者さま一人ひとりのQOLの向上に大きく貢献できると考えています。

また、紹介元となる地域の病院やクリニックの先生方からも、以前にも増して早期にご相談をいただけるようになり、安心して患者さまを託していただけているのであれば、これほど嬉しいことはありません。

緩和ケア病棟専任医師のスタッフステーションの様子。前田医師がいることで患者さまご家族の安心につながっています

もちろん、訪問診療を開始したことで、病棟スタッフの負担が増えたことも事実です。緊急入院への備えや、急な退院への対応など、柔軟な対応が求められる場面も多くなりました。しかし、そのような状況にも関わらず、常に患者さまのために尽力してくれる皆さんには、心から感謝しています。





訪問診療部 荒川看護師

訪問診療部の荒川看護師は、訪問診療部の立ち上げから携わり、パート勤務から現在は常勤スタッフとして活躍しています。立ち上げ時のご苦労や大切にしている思いをお聞かせください。

最初の一年間は記憶がないくらいです。居宅や訪問看護など外部の事業所と顔の見える関係づくりを進め、とにかく連携業務に奔走しました。在宅医療は様々な専門職の支えが必要です。訪問診療部の看護師として、多職種のハブとなり、パイプ役に徹することを心がけています。

情報が入らないことで、患者さまやご家族に不利益があつてはならないとの思いから、常に傾聴の姿勢でいます。

また、紹介された患者さまの最期のご様子を、基幹病院をはじめ、連携先には必ず、お手紙や直接会ってお伝えするようにしています。

一つひとつ信頼を重ねていくことで、安心して患者さまを任せいただけるようになる。患者さま、ご家族との出会いや、顔の見える連携が構築されていくことが、私自身の大きなやりがいにつながっています。

# さらなる挑戦へ

## 地域ニーズに応えるために、訪問エリアを拡大 「北くまもと在宅支援クリニック」をオープン



(イメージ図)

2024年の熊本市の高齢化率は27.5%。2040年には33.1%になる推計されており、外来に通うことができていた患者さまの高齢化、家庭の介護力低下などで訪問診療の需要は、今後も増えていくと予想されます。

そこで、くまもと在宅支援病院は、今年6月、北区に「北くまもと在宅支援クリニック」をオープン。訪問エリアを拡大し、地域のニーズに応え続ける病院として挑戦を続けます。

# メッセージ

# ひとり一人が専門性を発揮し、 働きがいのある病院を！

桜十字の「リハビリが強み」というイメージが先行したことで、地域のニーズと私たちが提供できる医療との間にギャップを感じ、もどかしい思いをした時期がありました。

しかし在宅医療に注力する中で、職種間の垣根が低くなり、顔の見える連携によって、どんな困難にもチームで乗り越える力が私たちの強みになったと実感しています。これからも専門性を磨き、地域に信頼される医療を提供し続けることで、私たち自身も誇りを持って働ける、そんな病院づくりを目指してまいります。

佐藤看護部長

# 失敗を恐れず、 挑戦し続ける姿勢を 大切にしたい!!

緩和ケアという強みをどう活かし、  
地域の期待に応える病院にしていくか、  
夜な夜な話し合ってきました。

スタッフにも「失敗してもいいから、やってみよう」と  
言い続け、少しずつ自主性が芽生えてきたように思います。  
今思えば、自分自身に言い聞かせた言葉でもあります（笑）。  
緩和ケアや訪問診療に関心のある医師の採用も進み、  
今年度は、新たにサテライトクリニックの開設にも挑戦します。  
さらに地域に信頼される病院を目指します！

園山事務長

# 新たな価値を生み出し、 病院のあるべき姿を目指す

地域包括ケアが重視される今、医療・介護・生活支援の一体的な提供が不可欠です。患者さまの「暮らし」に焦点をあて、訪問診療、外来・入院を含む継続的な医療へと進化し、生活全体を支える新たな価値を創造します。

病院が目指すのは、地域の皆さまにとって何でも相談できる「かかりつけ」の病院となることです。切れ目のない医療を提供し、患者さまやご家族が安心して地域で生活できるよう、職員一同、心を一つにして邁進してまいります。



三浦院長



## 緩和ケア病棟で今も続く、 ご家族からの温かいお心遣い



緩和ケア病棟の森田師長

緩和ケア病棟でご逝去された患者さまのご家族が年4回、季節ごとに飾る写真の入れ替えに来院されます。もともと写真が趣味で、病棟に飾ってもらえないかとの提案からはじまり、8年ほどになります。

病棟には患者さまに季節に移ろいを感じていただけるよう、ご家族が提供された四季折々の写真が飾られています。

## 編集後記

緩和ケア病棟を有する専門性の高さは、強みである一方、地域からは「特別な病院」という印象を持たれ、どこか距離を感じられていたかもしれません。しかし、その状況を打破し、地域にとってなくてはならない存在となるために、あきらめませんでした。

地域とのつながりを築くために、送迎サービスを開始という一歩を踏み出しました。事務長自らハンドルを握り地域を奔走する姿は、「行動こそが最大のメッセージ」を体現していました。

「どうすればできるか」を考え「まずやってみる」と行動したことが、次につながりました。菅村医師の入職で、訪問診療部の立ち上げが実現。在宅診療の体制づくりは、地域包括ケアという時代の要請に応えるものでもありました。

さらに、病院名を変更するという、大きな決断がありました。これは、病院の決意を明確に示すとともに、地域における役割を再定義することにもつながります。「家でも病院でも」というコンセプトのもと、新たなスタートを切ったのです。

取材中、職員皆さんが「家でも病院でも」という、コンセプトを口にしていたのが印象的でした。病院のミッションをひとり一人が理解し、実践しているのだと感じました。

今回、リーダーたちのあきらめない姿勢、病院の目指す姿を示すことの大切さを改めて感じました。お忙しい中、お話を聞かせてくださった皆さまに感謝申し上げます。